真実

「冷麺、食べに行かん？　いいお店があるの」

おばあちゃんの電話の声は弾んでいました。いきいきとした声でした。私は「ごめん。今晩はともだちと約束があるの」と答えたけれど、うそでした。おばあちゃんは「じゃあ、また今度ね」と、明るく言ってくれましたね。のちに、いっしょに食事をすることを私に断られ、受話器をそっと置くおばあちゃんの寂しそうな顔を想像して、私は泣きました。

おばあちゃんが一人で暮らしていた家は、私が生まれ育った町にあり、どんなちいさなこともうわさになって広がってしまう、そんな田舎気質を持つ地域です。まだ若かった私は、青春を謳歌せずにおばあちゃんと食事をしているところを、ともだちにでも見られたら恥ずかしいと思っていました。

あの日のやりとりがおばあちゃんとの最後の会話になりました。

おばあちゃんが亡くなった後、おばあちゃん行きつけの中華料理屋さんに足を運びました。おばあちゃんがいつも食べていたという冷麺を食べながら、涙がとまりませんでした。ほんとうに「恥ずかしいこと」をしてしまったと心から思いました。

お店の人から、帰り際「今度は孫を連れてくる」と、毎回言っていたと聞いて、また涙がこぼれました。「大きなハムだね。おいしいね」そんな会話をしながらいっしょに食事をしたかったのだと思います。

若い人には若い人の都合がある、というのがおばあちゃんの口癖でした。だからあの日も決して強くは誘いませんでした。

過去の言動を恥じても、あの瞬間は二度と再び巡ってはこない。人生の瞬間瞬間に何を選ぶか、何を大切にするかをおばあちゃんに教えてもらった気がします。

毎年命日には、お墓まいりの帰りに、あの中華料理屋さんに行くことにしています。おばあちゃんが逝ってから長い月日がたちました。

「今年も食べにきてくれたんやね。そうそう、おばあちゃんはねえ、いつもトッピングにチーズをかけてたよ」

初めて聞かされた真実です。私もチーズをトッピングして、冷麺を食べ始めました。「このチーズ溶けたらいいのになあ」とつい声に出して言ってしまいました。「おばあちゃんも同じこと言いよった。血は争えんとはこのこっちゃ」店に響く二つの笑い声は天井を震わせ、なぜかそのとき、あの日のことをおばあちゃんが許してくれたように感じました。

まだ言ってなかったですね。おばあちゃん、ごめんね。